

2015年
5月1日
No. 90
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



「北海道ひきこもり芸術展 in 札幌」特集号



イラスト 高津達広

Index

- 2ページ 北海道ひきこもり芸術展開催によせて
- 3ページ 芸術展出品者のプロフィール
- 4ページ ゼロから始める模型教室・総集編
- 5ページ 模型教室を終えて 七澤 広 他
- 6~7ページ ひきこもりと芸術
- 8ページ 編集後記 他

そこに在るといふ事の不思議さよ

大正から昭和初期に活躍した洋画家・岸田劉生の「壺の上に林檎が載って在る」という作品がある。そこに描かれている林檎は、誰かの手によって壺の上に置かれた林檎ではない。林檎自ら壺の上に上がり「そこに在る」のだ。主体性を持った一個の林檎でありたい。

この特集号は、2014年全労済地域貢献助成金事業により制作印刷されています

北海道ひきこもり芸術展 開催によせて

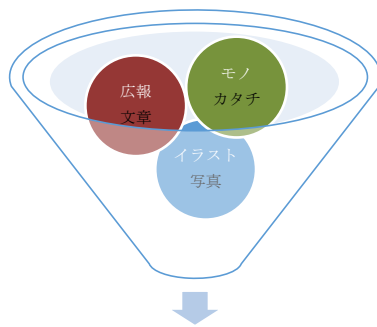
沈黙の言語を可視化する芸術展

全国に70万人以上いるといわれているひきこもりとは、様々な要因によつて社会的な参加の場面がせぼまり、就労や就学などの自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態にある人たちです。「北海道ひきこもり芸術展」では、ひきこもり者が持っている芸術的センスや独自の感性を活かす創造的な活動展開を目的に、これらの活動を社会に示すことによつてひきこもりの理解啓発と社会的孤立予防を図り、ひきこもりの人たちの自信回復と社会参加の促進につなげていくために開催することになりました。いみじくもフリーライターの池上正樹氏は「ひきこもりは沈黙の言語」だと評しましたが、「北海道ひきこもり芸術展」は、その沈黙の言語を可視化する役割を担っているといえるでしょう。

芸術展に寄せられたイラスト、模型、写真など総計108点の作品そのどれもが、ひきこもりをはじめとする自身のもっている弱さを得意分野に転換して等身大の自分を表現しています。表現を発表する場としての芸術展の開催は、海深く沈む弱さの断片を集めて、見える形にする効果があります。そして隔絶されがちな一般の人たちとひきこもり経験者たちが芸術というフィルターを通して一つの公平な舞台上立つことができるのではないか、そのような期待を抱きつつ、そこに対話のない「コミュニケーション

ションの良さを発見できれば、私たちひきこもり経験者の多くが悩むことの多い、人に対する不信任や恐怖心を溶かしていくことにもつながると思うのです。

今回の芸術展開催に向けて、無から有を創りだすための努力と労力を重ねてきました。21世紀の現在は効率化を追求されて、ゆっくりとしていられない時代です。だからこそ「千里の道も半歩から」半歩歩く距離を一人ではなく2人、3人で歩くことで一人前になれる。そのような歩み方で良いと考えます。



北海道ひきこもり芸術展

(全労済地域貢献助成金事業助成金申請書より転載)

ひきこもりは新しい文化の担い手

北海道ひきこもり芸術展は、モノづくり部門、広報づくり部門、イラスト写真部門で構成されています(右図)。

モノづくり部門では、当NPOが毎月2回開催している自助会SANGOOの会(ひきこもり当事者が緩やかに会話を楽しみながら元氣になっていく居場所)に参加する七澤広さんがリ

ーダーになり、「ゼロから始める模型教室」を2014年12月から今年の4月まで毎月1回開催し、模型作りを得意とする七澤さん指導により3名の参加者がプラモデルを作りました。広報づくり部門では、当NPOが年6回発行している会報づくりを担当する者が集まり、今回の芸術展特集号の記事をまとめています。イラスト写真部門では、会報の表紙を飾るイラストを手掛けた高津達弘さんの作品をはじめ3名の当事者からイラスト・写真を提供してもらいました。その他、詩やプラカードを提供してくれた当事者もあり、多彩な才能が芸術展に集まりました。

ひきこもりの人たちは自分だけの世界に入り込んで、一般の人から何の役にも立たないようなレッテルを貼られています。しかしその人たちの中には、自分の生きがいをしっかり持ってそのことだけを追求している人たちもいます。徹底的に生きがいを追求するからこそ新しい文化の創造につながるのです。この芸術展に出品している人達もまた、新しい文化の担い手として現在の渾沌とした社会とは真逆の生きがいある社会を目指そうとする人たちといえるのではないのでしょうか。

芸術展をご覧になる当事者やその家族をはじめ、支援団体機関の方や一般の方々、一人でも多くの方々が芸術展に足を運んでいただき、ひきこもりという状態にある人たちの背景にある悲しさや喜びを感じとって、地域の中で一緒に暮らしている人たちであることを認識してもらえれば幸いです。

北海道ひきこもり芸術展 in 札幌 出品者のプロフィール(アイウエオ順)



- **吾孫子 貴宏** (あびこ たかひろ) 作るにあたって、結構疲れました。みんなと模型教室をやれて楽しかったです。
- **AK** 統合失調症で療養中です。
- **貝瀬 郁弥** (かいせ ふみや) 中学1年生の時に不登校になりフリースクールに通いました。その頃より北海道の自然、風景の撮影を始めました。その後は通信制高校に通い大学に進学。海外に興味を持ち大学では英語を専攻しオーストラリア、ロシアなどに旅行、滞在し撮影をしています。この度の芸術展にあたり半年間滞在したニュージーランドでの作品を集めてみました。
- **川田 美菜子** (かわた みなこ) 北星余市高校卒業。不登校経験者。今までプラモデルなど触ったことすらなかったのですが、皆さんに教わって楽しく作れました(ほぼ他力本願) ジバニャン、コマさん、こまじろう。3体とも有名な妖怪です、簡単に作れるのでそこのお父さんもお子様と一緒にどうぞ!
- **藏谷 俊夫** (くらや としお) 求職活動に対する苦手意識から、大卒後7年間無職。その間にひきこもりグループホームにいたことも。その後就労したものの職を転々とし、現在食品工場勤務。精神保健福祉士の資格を持つ。
- **小西 恵司** (こにし けいじ) 車を運転するのが苦手なので、長距離を自分の足で歩くのが大好きな人間です。デジタルカメラをいつも持ち歩き、撮影した写真から「人間の心」をテーマに、短文の詩を作るのが趣味。自分なりに精神世界を多角的アプローチで追求する事がもともと好きなので、説教じみている理屈っぽいかもしれません。
- **杉本 賢治** (すぎもと けんじ) 対人恐怖症がひどく、普通高校から通信制高校に転学。長くひきこもる。大学卒業後、二度目のひきこもり。27歳で精神分析療法始める。現在、仕事は清掃を中心にアルバイトを続け、SANGOの会へ参加しながら、ひきこもりや人文学のインタビュー活動を行う。今夏、一般出版社よりひきこもりに関するインタビュー集出版予定。
- **高津 達弘** (たかつ たつひろ) 絵は元々、ひきこもりになってから退屈しのぎで、スケッチブックに鉛筆で落書きするような感じで描き始め、自助グループなどで出会った人たちから、パソコンで絵を描く方法を教わって描く様になりました。のんびりと描いているのであまり上達はしませんが、芸術展にも出させていただき感謝しています。稚拙な絵ですが、観ていただければ幸いです。
- **友民** (ともみ) 初めまして友民です。生まれつき身体が弱く発達障がいとかと向き合いながら絵を描く人をしています。たまにポストカードやボタン小物を作って売っていますが、体力がとても少ないのでぼちぼちやっています。
- **七澤 広** (ななさわ ひろし) 就活の躓きから精神疾患を発症。込み入った会話さえなければ外出は出来る状況が数年続いた後、SANGOの会に参加するに至る。今は医療機関の診察やデイケアも利用しつつ、自分に出来ることを地道に増やそうとしています。
- **藤原 光輔** (ふじわら こうすけ) 若者サポートステーション各プログラム等に参加、さまざまな立場、年代の方との交流の機会を得る。今回の高津氏との共作も、この場での出会いがきっかけとなって立ち上がった企画である。
- **吉川 修司** (よしかわ しゅうじ) 小学生から不登校を経験し大学卒業後、就職をすることなくアルバイトを10年続けた。現在レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク理事。会報編集者の一人として会報作成を続けて、少しは文章がうまくなったかと思えます。



ゼロから始める模型教室 総集編

写真 1

「ゼロから始める模型教室」では、プロ顔負けの模型づくりの腕前を持つ七澤広さん（自助グループSANGOの会参加者）の指導の下、芸術展出品に向けてプラモデルを作りあげる。教室でできない部分は自宅に持ち帰り作業を進めるというもの。指導の七澤さん他、参加者2名と田中敦理事長が参加。参加者は全てひきこもりの経験者たちで、模型づくりに初めて挑戦する人もいた。会場は、北海道立道民活動センターかでの2・7「創作室」、札幌市男女共同参画センター「工芸室」を使用した。



2014年12月15日に行われた第一回。参加者それぞれが作りたいプラモデルのお披露目。「ガンダムUC」「妖怪ウォッチ」「三菱コルト」「バック・トゥ・ザ・フューチャー デロリアン」多彩なプラモデルが揃った（写真1）。

参加者と一緒に作りたいという思いから参加した田中敦理事長は、自家用車として使用している「三菱コルト」を早速箱から開けて作り始め、七澤さんの指導の下熱心に模型づくりに没頭していた。「サスペンションを先に色塗りしましょう」と七澤さんに言われ、黒のポスターカラーの入った瓶に筆を入れた田中敦理事長は、「懐かしい匂いだね」と子どもの頃に戻ったかのように黙々と色を塗り重ねていた。その横では、参加者の一人が「妖怪ウォッチ」を初心者とは思えないような手際の良さでできばきとパーツを外し組み立てていた。「ガンダムUC」を組み立てる男性は、淡々と作業をすすめていた。「上手く作っていますね」と尋ねるとガンダムのプラモデルはこれまでも作り続けてきたほどのキャリアをもっていた。



写真 2

年が明けて1月22日に行われた第2回では、七澤さんが「芸術展に出品する人たちや、プラモデル制作している人だけではなく、SANGOの会に参加する人たちと一緒に芸術展を作り上げていきたい」と述べ、模型づくりを見学に来ていた人と会話しながら堅苦しくない雰囲気を出していた（写真2）。

2月16日に行われた第3回は、大雪のため田中理事長と七澤さんの二人で開始したが、3人の見学者があり賑やかに進行。プラモデル用接着剤や塗料についてのミニ講座も開かれ、

「接着剤の使い方も幅が広いんですね」と見学者が感想を述べた。

3月24日に行われた第4回目は3名の参加。模型作りの最終工程をじっくり指導してもらいながら、仕上げの段階に入る。田中理事長の「三菱コルト」もできるだけ実物に近づけるため、七澤さんが部品を改造するなどパーツに工夫を凝らす（写真3）。



写真 3

4月20日に行われた模型教室最終回には、全員が揃った。「妖怪ウォッチ」を作った参加者は、いち早く完成品を見せてくれた。その他の参加者の作品もほぼ完成し、各作品の塗装などは七澤さんが行い、最終的に仕上がるのは5月上旬になる。この日は、芸術展に向けて、会場設営に必要な備品、模型以外の展示方法など打合せをした後、芸術祭の会場となる札幌市教育文化会館ギャラリーに見学へ行った（写真4）。この真っ白な空間が約100点もの作品群で埋め尽くされる。どんな表情に変貌するのか。模型教室終了後、民放のテレビ取材も受け、日増しに緊張度が高まるが、ひきこもりや病気を乗り越えながら経験してきた人たちの美の祭典への期待は大きい。



写真 4



三人の受講生を迎え、5回に渡って模型教室を開催することができました。世にも沢山いらっしやいました。世に多々ある趣味の中でプラモデルは地味な方なのでわざわざ意識しなければ、身近に売っているのも気がつきにくいかもしれません。実際にやってみたり見たりしてみたりして如何だったでしょうか。

さて、一度躓いてしまえば世界は「自分」と「家族」だけに狭まってしまふこともあります。——同じような毎日を繰り返すも時間だけは無情に過ぎていく。どうにかしなければと考えてみても、知恵はとうの昔に尽くしている。——

そうした方々の訪ね先としてSANGOの会がありますが、よその人とお話するのが怖ければ、「手」を動かすことが第一で「口」は二の次三の次な場所ならばどうでしょうか。実際に作業するのは勿論楽しいですし、ただ眺めているだけでもありません。珍しい体験というのが何か新しい事を考えるきっかけに少しでもなれないかと思って教室を進めてきました。どうやったらもっと興味を持ってもらえるか頭も捻ってきたつもりです。正直楽ではなかったですけど、久々に手応えを感じる日々でした。皆様、ご協力ありがとうございました。

ひきこもり川柳一題

『明日こそ その明日こそは いつの日か』



小松原右京

明日こそは学校へ行く、明日こそは・・・しかし次の日も休みつづけてしまうことへの後ろめたさを思い出して詠んだ一句。やるせない毎日の連続のような印象もあるが、「明日」は必ず「今日」とは違う日であるはずだから、「明日」に期待する希望が「いつの日か」来るだろうと思いたい。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO 法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

会員募集しています

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり者が社会に出た時、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解していただき、ひきこもり者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

会費

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000 円	入会金 1,000 円	一口 1,000 円～
年会費 3,000 円	年会費 2,000 円	

ひきこもりと芸術 —自分を活かす道とは何か—

芸術の前では誰もが平等

半年間寝たきりのひきこもり男性が生産的ではない時間を生産的に転換させるため、ひきこもりをやめた日のポートレートと室内写真を撮り、これまでの自分の経緯を開示し、ネットを通じて同じような状況にあるひきこもり当事者の自室写真を募集して展覧会を開催した例が、フリージャーナリスト池上正樹氏がブログ連載している『ヤモンドオンライン』『引きこもり』

する大人たち』で紹介されていた。この男性は美術系の大学を卒業していたこともあり、自己表現をする素地が残されていたため生産的活動に結びついたといえる。「絵描きの絵ほど観る価値はない」とある芸術家が言っていたが、21世紀の現代は、インターネットやスマートフォンの普及も手伝い、素人がアーティストになって情報発信できる環境が整備されている。寝たきりのひきこもり男性が個展を開催できる時代になっていることはその象徴でもある。

そもそもアーティストと呼ばれる人は、自分のコンプレックスやトラウマを何か別の表現形態により昇華しているようなイメージがある。それが確かな表現ではないかもしれないが、会話

によるコミュニケーションが著しく困難であっても、それ以外の詩や絵画などに得意な才能を示す例は多い。

言葉による会話ができないような重度の障がいを持つ人が作成した詩に著名人やプロのアーティストがその詩をもとにして作品を提供する。いわば障がい者とアーティストがコラボする「ハート展」という展覧会で、不安神経症で立ち直れない状況の中、「詩は上手に書かなくてもよい。生きるために書けばよい」という文章に出会い、励まされ詩作に没入した女性の作品を見た。プロがつくる詩を超えた魂に触れるような熱さが文字に込められていた。それは何も詩に限ったことではない、絵画、イラスト・写真、陶芸など様々な表現媒体が弱者の心をとらえて離さない魅力をもっている。

そのような芸術という分野は、ある一つの階層にだけ許されているものではなく、どんな人たちにも平等に入ることのできる世界だ。だから日本人がゴッホやゴッギャンの絵画を観て内に秘めたエネルギーを感じることができるのだろうか。日本画家の千住博は「芸術とは人間の行為であり、人と人とのコミュニケーションである」と発

言している。まさしく芸術作品の前では誰もが平等に作品（作者）と対話ができるのである。そして、事項で述べる茶道や、新聞づくりの具体例からも理解できるが、独創性を活かすことで誰にも気遣うことなく自然体で何かに没入できることが、ひきこもりと呼ばれる人たちにとって、社会との接点になるような気がする。

静（せい）なる自分を生かして

当NPOが任意団体として発足し、1周年を記念したイベントが2000年8月に開催された。「私の自己表現法 静なる自分を生かして」と題されたこのイベントには、2日間で150名もの来場者を迎えた。会場には全国にいる高校中退や不登校・ひきこもりをしている若者から寄せられた短歌や生花グループとのタイアップによる創作いけばな作品などが展示された。壁に見立てた中心部分に破れたダンボールに「学歴・就職・世間体」と書かれ、破れた空間部分に生花が設えている大胆なオブジェは来場者の目を引いていた。

会報ひきこもり第3号の記事によると「これまで一度も定職につかず、半ひきこもり状態に負い目をもち続けてきた32歳の青年が茶道との出会いから一歩前に出ることができた思いを点前にてはじめて人に披露した」と記載されている。この男性は、現在当NPOの理

事を務めている吉川修司（筆者）である。筆者が茶道を始めたのは2000年の4月。社会に出ることに躊躇していた頃、アルバイトを続けながら団体活動を本格的に始めた時期でもあった。

当時の心境を茶道の専門誌「花泉」(2000年6月号)に投稿した際、次のように述べている。

「茶道の稽古を始めてから、今まで気づかなかった『静』なる自分の良さが少しずつ見えてきました。それは適度な緊張感の中に身を置き、お茶を点てる研ぎ澄まされた精神の源こそが『静』なのです。表面はおとなしく弱いけれども、内に秘めた力強さが『静』なのです。不登校ひきこもりをしている彼らに茶道を通じて、日常の自分にはない新しい自分に出会ってほしい。その意味から、煎茶道は自己表現への第一歩になると感じています」

筆者が言つところの自己表現とは、自分自身とのコミュニケーション。その行き着く先には、一つの事に没入することで、悩んでいる自分すら忘れた境地にたどり着き、客観的に自分を見つめることだ。

あれから15年が経過して47歳になった筆者は、親亡き後の一人暮らしで感じる孤独感は少ない。その背景には禅の思想にも通じる座の文化が根強く残っているのかもしれない。

金曜交流会かわら版

2007年6月から就労支援を受けるため、札幌市若者支援総合センターへ通い始めた筆者は、少しずつ自分よりも若い世代の人と交流を持つ機会が増え、そこに通って来る人たちとゲームや雑談で話すことのできる居場所を主宰するようになった。

札幌市若者支援総合センターには、働くことに困難を感じるひきこもりやニートといった人たちが就労プログラムを受けに来ていた。この交流会で出会ったのが今回の芸術展に作品を出品してもらった高津達弘さんと藤原光輔さんだった。筆者と彼らとは世代が違うものの、趣味が共通し一緒に過ごしているのも嫌な雰囲気にならない自然な人間関係を構築していた。

この出会いがきっかけとなり、NPOで会報作りを手掛けていた筆者が発起人となり、交流会で行われた内容を記載した「金曜交流会」（写真1）というA4版両面2ページのかわら版を共同で作成し、詩の勉強を続けたこともある藤原さんが、高津さんのイラストを見てそのイメージに合う詩を書いてももらった。出来上がったかわら版は、センターのロビーに掲示した。

かわら版第3号にはじめて掲載した高津さんが描いた三日月を見つめる黒猫のイラストと詩（芸術展出品作品）が掲載された紙面を見た高津さんは満



（写真1）2009年12月に制作された「金曜交流会」の紙面（A4版カラー）。高津達弘さんイラスト（タイトルロゴも）と高村光太郎の詩を掲載。裏面には当事者が作成したクロスワードパズルも出題されていた。

面の笑顔で「吉川さんの文書も上手だし、藤原さんの詩も素敵です。作成して良かったですよ」と感想を述べた。2009年室蘭保健所で行われた経験発表会で筆者はこの時の経験を次のように述べている。

「自分よりも若い人に私自身の行為が認められた気がしました。これは、本当に嬉しく心が揺れ動くような感動でした。私自身にも、まだ人と一緒に喜ぶことができるという感性があったことも驚きでした」

人と人との信頼関係は一朝一夕で結ばれるものではない。他人からみればたわいなのないことや、回りくどい行為を一緒に行うことでしか得られない

喜びというものが、信頼関係をつくる大事な要素だと感じられる。

あれから6年を経て、イラストや詩が芸術展で花開くことは、信頼関係が生んだ賜物だと感じる。この数年で高津さんのイラストは、会報のイラストや成果物などの表紙を飾るまでに成長していった（写真2）。人との出会いが、信頼を生み出し、その人の持つ力を表に出すことに成功した。正にエンパワーメントが発揮された事例といえるだろう。



（写真2）2014年5月に出版された「苦勞を分かち合い希望を見出すひきこもり支援」法中理事長高津達弘さんのイラストを飾った。

芸術をバネに自己をプロデュース

筆者が未来の展望が見えない中で続けた茶道や、「イラスト」「詩」「文章」それぞれの得意分野を活かして一つの新聞をつくるという経験。それが誰かから与えられたカリキュラムではなく、自発的に始め無理なく進行していく体験が前へ進ませる原動力になっ

た。このような体験が創作活動、広くとらえれば芸術にはあるのかもしれない。

日本では、指導・訓練によって一般社会に適合させるための就労支援が中心だが、韓国ではHajjaセンターと呼ばれる施設で、官・民・学が連動して若者支援に取り組み、青少年の育成、持続可能な職場の創出を行っている。支援の根幹には、困っている若者は新しい地域社会をつくりだす主体者とならえ、競争・敵対・排除と闘い、孤立を乗り越えていく仲間と出会い、新しい価値、新しい社会を創り出すねらいがある。

筆者が高津さんらと一緒に自分の持っている得意分を新聞という作品を作り上げた行為。それは、もしかすると孤立を乗り越えていく仲間との出会いが作り上げた作品なのかもしれない。このような関係性の中で人は揺らぎながら自分を見つめ成長できるのだ。

ひきこもりの人たちの多くが社会にできることが出来ない自分を責めている。芸術を通して自分をプロデュースする力を養い、一般社会に身を委ねるような生き方だけが人生ではないことが発見できれば、ひきこもりというフィルターを通して新しい価値、新しい社会を創り出す原動力になるのではないだろうか。

◆「SANGOの会」例会のご案内

2015年5月、6月は下記日程にて行ないます。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、下記の期日とは別に例会を設定しますので、事務局までメール、電話でお問い合わせ下さい。

と き：2015年5月11日(月) 午後1時15分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター 4階 札幌市ボランティア活動センター ボランティア研修室A

と き：2015年6月17日(水) 午後1時15分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター 3階 第3会議室

場 所：札幌市中央区大通西19丁目

参加費：無料

参加条件：ひきこもり当事者または経験者とその家族

参加方法：直接会場へお越しください。(事前申し込みは不要です)

◆新たな助成金事業が決定 ～ひきこもりで悩んでいる当事者に手紙(レター)を送ります～

ひきこもりピア・サポーターによる手紙を活用した効果的なアウト・リーチ実践研究

(平成27年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成事業)

「手紙(レター)」に着目した実践活動に取り組み、手紙によるアウト・リーチ(訪問支援)を行い効果的なアウト・リーチ(訪問支援)実践のあり方を研究することを目的に実施します。対人不安が強いひきこもり者と無理なく「出会うきっかけ」として接触を試み、「有意義な仲間」としての誘い掛け、彼らと対等な立場に立つことが可能なひきこもり経験者(ピア・サポーター)が手紙というツールを有効活用します。

ひきこもりで悩んでいる家庭で手紙によるアウト・リーチを希望される方は事務局までお問い合わせください。

☆刊行物の紹介☆

独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業 北海道ひきこもり居場所支援プログラム開発事業報告書

(A4版、一部カラー、101ページ)

第1章 ひきこもり当事者への居場所支援のありようと今日的な問題の所在

第2章 北海道ひきこもり居場所支援実態調査分析と考察

第3章 北海道旭川市、埼玉県、和歌山県からみた困難事例検討

第4章 モデル事業としての「道産こもり179大学」 他

一冊500円【郵送料】で頒布しています



☆編集後記☆

豊かな感性が新たな社会を切り開く創造力を培うといつも以上に力を込めた全国初の企画「北海道ひきこもり芸術展 in 札幌」開幕。その嬉しさはひとしお。満50歳にして「懐かしい匂いだね」と取り組んだ七澤広講師の「ゼロから始める模型教室」。これからも当事者が輝く場面を創り出していきます。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください